

## コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

### アメリカンビーチグラス (*Ammophila breviligulata* Fern.)

笹木 義雄 (柳学園中学・高等学校) PXU17214@nifty.ne.jp



アメリカンビーチグラス (*Ammophila breviligulata* Fern.) は、砂浜に生えるイネ科オオハマガヤ属の多年草であり、オオハマガヤとも呼ばれ、種子による繁殖は行わず地下茎により栄養繁殖する。草高は 60~100 cm であり、基部は古い葉鞘に包まれ、葉身は内巻し、長さ 40~50 cm になる。小穂は白色で、1 小花からなる。日本では、青森・山形・宮城・新潟・石川・静岡・鳥取県で分布が確認されている<sup>6)</sup>。北日本の海岸を中心に自生するハマニンニクと良く似ているが、アメリカンビーチグラスは、葉の色が少し薄く黄色い点、葉が細く巻く点、1 小花からなるため穂状花穂が細く見える点が特徴的であり、筆者はこれらの点で両者を区分している。

この植物は、もともとアメリカの北西部オレゴン州を中心に海岸砂丘地に自生する植物であり、砂の堆積の著しい場所において旺盛な繁殖をする<sup>7)</sup>。当初、鳥取農林学校の原勝氏らによって砂を効率的に補足する目的で鳥取砂丘に砂草として導入された<sup>8)</sup>。コウボウムギやハマニンニクなどの日本に自生する海浜植物にも、砂の堆積の多い場所に生育可能な種があるが、アメリカンビーチグラスはこれらの種よりも草高が高く砂の補足能力が高いこと、砂の堆積量が著しく大きく貧栄養な環境でも旺盛に繁殖することから、右上の写真に示す北条砂丘など、鳥取県を中心に日本海沿岸の砂丘地の海岸砂防の現場で主に使われるようになってきた<sup>9)</sup>。

アメリカンビーチグラスの植栽方法については、原ら<sup>1)</sup>によると、植え付け時期は 12 月と 3 月頃、植え付け間隔は列間 50 cm、株間 30 cm、植え付け深さは 25~35 cm、施肥は 3 月下旬から 4 月中旬にかけて 0.1ha あたり窒素 11.25 kg を施用するとある。飛砂防止目的で前砂丘に植栽する緑化植物としては、非常に優れた種であり、各地の海岸砂防において高い評価を得てきた<sup>5)</sup>。

しかし、2005 年 6 月に外来生物法 (特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律) が施行され、外来種に対する社会的な関心が増すにつれて、アメリカンビーチグラスに対する評価の風向きが変わり始めた。

日本自然保護協会主催の「市民参加の海岸植物群落調査」の結果、全国的にコマツヨイグサ、キミガヨラン、オオフトバムグラ、ホソムギなどの外来種が問題になっており、特に砂浜の外来種としてアメリカンビーチグラスが特筆すべき種としてあげられた<sup>8)</sup>。東北地方を中心に、植栽された松の保安林の前面を一面のアメリカンビーチグラスが占拠し、在来の砂浜植物をほとんどみかけない浜もあるとされる<sup>8)</sup>。これ

らのことから、千葉県立中央博物館の由良浩氏<sup>8)</sup>は、「在来の自然の植生に害を与えている以上、オオハマガヤ (アメリカンビーチグラス) の導入は直ちに止め、既に植えたものは除去し、従来の自然の砂浜植生に戻していくべきでしょう。」と総括した。

以上のように、時代の経過とともに、社会的な要請も変化してきた。アメリカンビーチグラスの主舞台である海岸砂丘の管理についても、戦後の飛砂防止対策一辺倒の状況から、現在では、防災にも配慮しつつ、本来の砂丘生態系保全・再生を両立する環境配慮が必要とされる時代となった<sup>4)</sup>。戦後から 1990 年代にかけての砂草植栽のエースは、引退する時期にきたといえる。今後は、山・川・海・砂丘といった広域で砂の移動を考慮しながら、防災重点地区、保全・再生重点地区などの全体の砂丘管理計画を立案し、個々のゾーンの緑化や保全・再生を具体的に考えることが望ましい。

最後に、アメリカンビーチグラスの代替種には、北海道~本州の日本海沿岸地域および茨城県以北の太平洋沿岸であれば、その地域に自生するハマニンニクを利用することが有効と筆者は考える。ただ、これより以西・以南の地域は、この植物の本来の生育地ではないため、導入を避ける必要がある。なお、その他の導入植生種については、村井ら<sup>2)</sup>が詳細を示しており、現状に併せて適宜加えることが望まれる。

#### 引用文献

- 1) 原 勝・田中一夫 (1954) 海岸砂丘地におけるアメリカン海岸草の植栽試験 (第 1 報), 63 回日林講, 227-229.
- 2) 村井 宏・石川政幸・遠藤治郎・只木良也 (1992) 日本の海岸林, ソフトサイエンス社, pp.384-393.
- 3) 日本砂丘学会 (2000) 世紀を拓く砂丘研究—砂丘から世界の砂漠へ—, 農林統計協会, pp.93-100.
- 4) 日本緑化工学会 (2006) 環境緑化の事典, 朝倉書店, pp.304-306.
- 5) 砂防学会 (1985) 海岸の砂防, 石崎書店, 63 pp.
- 6) 清水建美 (2003) 日本の帰化植物, 平凡社, 256 pp.
- 7) Wiedemann, A. M., Dennis, L. A. R. J. and Smith, F. H. (1999) Plants of the Oregon coastal dunes, pp.65, Oregon State University Press.
- 8) 由良 浩 (2006) 海浜植生をむしばむ外来種オオハマガヤ植栽はただちに中止を!, 自然保護, 493. 日本自然保護協会.